教育・保育実習経験による保育養成系学生の表情認知変化

○長屋 佐和子¹・小河 妙子²

(1名古屋女子大学・2東海学院大学)

キーワード: 保育士養成課程, 情緒読み取り, 表情認知

Differences of the emotional reading between sophomore and junior students of early childhood education course.

Sawako NAGAYA¹, Taeko OGAWA²(Nagoya Women's University¹, Tokai Gakuin University²)

Key Words: training course of nursery teachers, emotional reading, facial expression recognition

序論

本研究は、保育士の熟達化の様相とそれに関わる諸要因について検討する一連の研究の一部である。保育士養成において、実習等による実践的技術の習得は最重要課題であるにもかかわらず、その習得過程や変化要因などについては明らかになっていない。特に、幼児期には言葉によるやり取りが十分に行われないことから、その表情をいかに認知するのによって、保育の質が左右されると考えられる。そこで本研究では、特に乳幼児に対する表情認知を取り上げて、保育士養成課程に所属する学生の特徴について明らかにすることを目的としている。

母親の表情認知は出産後に大きく変化し、女子大学生及び妊婦とは異なる特徴を示す(長屋, 2009)。また、複数の研究により、乳幼児との接触体験が、学生の意識を変化させると述べられている。このことから、保育養成教育を受けている学生の表情認知は、実習体験を経ることによって変化することが推測される。

本研究では、保育養成系の学生を対象とし、教育・保育実習を受ける前の2年生と、教育・保育実習を受けた3年生の学部学生の表情認知特性を比較することにより、保育士養成課程学生の特徴を明らかにする。

方法

調査対象者 東海地方の保育士養成課程の女子大学生、2年生127名(平均年齢19.07歳, $SD=0.26$)、および3年生103名(平均年齢20.41歳, $SD=0.42$)を対象に質問紙調査を実施した。
調査内容 日本版 I FEEL Pictures (JIFP): JIFP は他者の情動の読み取りについての特徴を測定するため、井上・濱田・深津・滝口・小此木(1990)が作成した30枚の乳幼児の表情写真から構成された図版セットである。この図版セットから母親データ(長屋, 2009)の快・不快評定平均値を参考に、6枚の図版(快:図版4・21, 不快:図版12・17, ニュートラル:図版9・29)を選定した。それぞれの写真の表情が示していると感じられる快・不快の程度及び覚醒度について5段階(1:不快~5:快)で評定を求めた。これに保育者効力感尺度(三木・桜井, 1998)を加えて、質問紙を作成した。なお、質問紙の配布・実施・回収は講義中に行った。

結果

質問紙を実施した結果を集計し、保育士養成課程の2、3年生別に保育者効力感の得点に基づいて高群(2年38名, 3年31名)・中群(2年41名, 3年34名)・低群(2年48名, 3年38名)の3群に分類した。学年、保育者効力感3群によるJIFP得点の平均値の差について分散分析を行った。

その結果、覚醒度評定値では、図版9(2年生:平均=2.37, $SD=0.59$, 3年生:平均=2.39, $SD=0.60$, $F(1, 2)=9.74$, $p<.01$)、図版12(2年生:平均=3.16, $SD=1.14$, 3年生:平均=3.50, $SD=0.99$, $F(1, 2)=6.57$, $p<.05$)、全図版合計(2年生:平均=18.83, $SD=2.66$, 3年生:平均=19.81, $SD=2.40$, $F(1, 2)=8.39$, $p<.01$)において学年による主効果が認められ、いずれも2年生より3年生の方が覚醒度が高い結果が示された。

次に保育者効力感の主効果では、図版17の快・不快評定値(低群:平均=1.47, $SD=0.88$, 中群:平均=1.20, $SD=.40$, 高群:平均=1.29, $SD=0.57$, $F(1, 2)=3.35$, $p<.05$)と、全図版の覚醒度合

計(低群:平均=18.84, $SD=2.41$, 中群:平均=19.17, $SD=3.00$, 高群:平均=19.91, $SD=2.19$, $F(1, 2)=3.42$, $p<.05$)で有意差が認められた。多重比較を行ったところ、図版17では保育者効力感低群は中群より快・不快評定値が高く、全図版の合計値では保育者効力感高群が低群よりも覚醒度が高かった。

また、図版21(2年 低群:平均=3.54, $SD=0.743$, 中群:平均=3.75, $SD=0.67$, 高群:平均=3.58, $SD=0.79$, 3年 低群:平均=3.79, $SD=0.53$, 中群:平均=3.50, $SD=0.83$, 高群:平均=3.84, $SD=0.69$, $F(1, 2)=3.08$, $p<.05$)では保育者効力感と学年に快・不快評定値の交互作用が認められ(図1)、図版29(2年 低群:平均=2.54, $SD=0.87$, 中群:平均=2.93, $SD=0.88$, 高群:平均=2.89, $SD=0.83$, 3年 低群:平均=2.97, $SD=0.82$, 中群:平均=2.65, $SD=0.98$, 高群:平均=2.71, $SD=0.82$, $F(1, 2)=3.96$, $p<.05$)で保育者効力感と学年に覚醒度評定値に交互作用が認められた(図2)。このことから、保育者効力感低群、高群は、3年生の方が快・不快評定値が高くなり、中群は3年生の方が快・不快評定値が下がることが示された。また、保育者効力感低群は3年生になると覚醒度評定値が高くなり、中群、高群は学年が上がると覚醒度が低くなることが明らかとなった。

図1. 図版21の快・不快評定: 学年 × 保育者効力感の交互作用

考察

これらの結果より、保育士養成課程の学生は実習を経験することによって、乳幼児の表情から明確な情緒を感じるようになることが示された。保育者効力感が高い方が、乳幼児の情緒を強いものと認知することが明らかになった。また、特定の図版において、実習経験、保育者効力感と乳幼児の表情認知に関連性が認められた。図版21では保育者効力感が中程度の場合のみ、学年が上がるにしたがって不快と読み取りやすい傾向がみられた。図版29では、低群のみ、学年が上がると表情を強く読み取る傾向が示された。これらのことから、保育士を目指す学生は実習を経ることによって、乳幼児の表情に集中して、その情緒を明確に読み取ろうと試みるようになるが、その際、保育者としての自信に欠けている学生ほど情緒を弱いものと認知する傾向がある。このような傾向は図版によって異なり、あいまいな表情の場合は、保育者としての自信がその受け取り方を左右すると考えられる。

引用文献

長屋佐和子 (2009) 日本版 IFEEL Pictures に対する反応特性の研究 風間書房